

人が神に祈るとき

現在、西都原考古博物館で開催している国際交流展「海山に宿る神々～日韓の祭祀遺跡～」は、古代の人々が様々な場所で神をまつた痕跡（祭祀遺跡）のうち、海や山の神様に関わるものを取り上げ、人々が神まつりに込めた信仰や思いについて迫ろうとする企画展示である。韓国で祭祀遺跡といえば、かならず名前のがる竹幕洞祭祀遺跡や月出山祭祀遺跡といった代表的な祭祀遺跡の出土品をお借りすることができ、展示資料 54 点すべてが宮崎県内では初公開となっている。また日本国内の資料としては、発掘調査で確認された南九州の祭祀遺跡出土遺物はもちろんのこと、県内各地の神社が所蔵する資料など、ふだんは目にすることが難しい品々も数多く含まれており、この機会にぜひご覧いただきたい。

今回、展示を準備する中で、古代の人々が祭祀について書き残した記録類にもいくつか目を通したが、たいへん興味深く感じたのは『入唐求法巡礼行記』である。平安時代の僧侶である円仁（慈覚大師）が、承和 5 年（838）遣唐使にしたがって唐に入り、同 14 年（847）に帰国するまでの見聞をつづつたものであるが、船の出航前や航行中に人々が頻りに祭祀を行う様子が記されている。そして、一行の中に僧侶が含まれているにもかかわらず、祈りの対象は仏だけでなく様々な神にも及び、その中には土地の山神や島神など、かなりローカルな神様も見受けられる。それだけ航海中の安全を願う思いが強かったといえるだろうし、当時の海洋航海が非常に危険であったことがよく分かる。

ところで、今回の国際交流展準備には多くの困難が伴った。韓国資料の借用交渉が暗礁に乗り上げ展示の再構成を余儀なくされたし、8 月末の借用時には韓国が未曾有のゲリラ豪雨に襲われた。9 月 30 日には台風 24 号の影響で博物館への電気供給がストップしたため、一時は 10 月 6 日の開会もあやぶまれたし、開会式の時には台風 25 号が九州と韓国の間を通過し、来賓の国立羅州博物館長が無事帰国できるかギリギリまで分からなかった。余談ではあるが、停電の影響と思われる貨物用エレベーターのトラブルにより、エレベーター内に閉じ込められるという 5 年間の勤務で初めての珍事も経験した。ふだんは「無宗教」を自認する私であるが、次々と押し寄せる困難の中、これを解決してくれるならば、あらゆる神仏にすがりたいと切実に思った。神々への信仰が生まれる瞬間を実感した。

そのような怒濤の準備過程を経て、国際交流展は何とか開催の運びとなった。まだ油断はできないが、無事に終了したあかつきには、国立羅州博物館から見はるかす月出山の神に感謝の祈りを捧げたいと思っている。

（堀田孝博）

【参考文献】

圓仁 1990 『入唐求法巡礼行記』中公文庫 中央公論社 （訳 深谷憲一）



月出山 (韓国 全羅南道靈岩郡)